よかネット
YOKANET

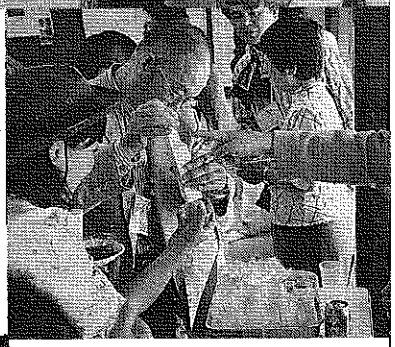
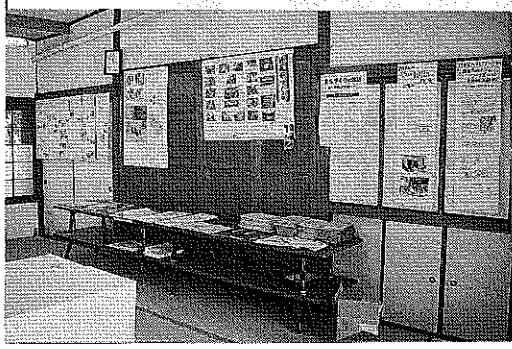
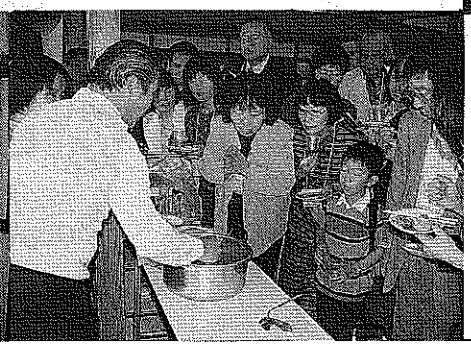
No.64　2003. 7
㈱よかネット

もくじ

NETWORK
人もうけ通信17　年々値下がりする住宅ではなく、
住む人の工夫によって値打ちが上がっていく住宅づくりをしよう！！
～田園楽住の会が動き始めています～ ---------- 2
第３回「協同組合　地域づくり九州」地域づくりセミナー ---------- 6
大規模投資型でなく、土地柄を活かした地域産業の「ぶどうの樹」
今年もたくさんの方に来ていただきました
～第11回よかネットパーティー～ ---------- 9
皆様から寄せられた「よかネット」へのご意見、近況などの紹介① ---------- 10
見・聞・食
宗像大社・沖ノ島体験記
清々しくもあり、面白きこともある沖ノ島 ---------- 12
企業と技術協力で障害者の雇用の場をつくった
「福祉工房　亀のパン」 ---------- 13
蔵を使って、町中でホタルをみられる環境づくり ---------- 15
近況
ＮＰＯが会員に支給する交通費とは ---------- 16
米の粒度を測りに九州大学まで ---------- 17
都会の若い核家族は孤立しそうで大変だ ---------- 18
本・BOOKS
都市・農村の新しい土地利用戦略 ---------- 19
都市のルネッサンスを求めて ---------- 20

●今年もたくさんの出会いがありました
～第11回よかネットパーティー～

①乾杯前なのにもうこの人だかり
②大きな歓声が上がったモンゴル舞踊
③今年も登場！アカペラコーラス隊
④呼子から来たところてん。自分でところてんつきでついて食べる
⑤みんなでわさびたての実演をのぞき込む
⑥案内・報告などいろいろな壁新聞が並ぶ

写真①	写真②	写真③
写真コメント		写真④
写真⑥	写真⑤	

人もうけ通信17

年々値下がりする住宅ではなく、住む人の工夫によって値打ちが上がっていく住宅をづくりをしよう！！

――田園楽住の会が動き始めています――

糸乗　貞喜

最近、出会う人から「田園楽住どうなっていますか」と聞かれることが増えています。「早く現地見学会をやってくれ」「もう糸乗さんの納得しているところなら、その気になりますから早くして下さい」など、せっかちな意見も届いています。

特に新しい動きとして、私の住んでいる糸島の農家の人々からの質問が入るようになっています（もちろん入会者もいる）。私としては、この人々との協議を進めて、どれくらいの地代なら「事業参加してもいい」と思うのか、合意形成のベースについての意見を聞いてみたいと思っています。

都市側の人々には「都心マンションの半分ぐらい」と言っていますが、農村側の人々に「老齢年金並の地代が入る」ようにするにはどの辺りが相場か、どれくらいの「事業フレーム」にしなければならないのか、当たりをつけたいと思っています。

なんだか、農村や都市の人々が寄り集まった「再開発計画」みたいです。ある意味では新しい“住まい方”の新規開発（古い住まい方からの再開発）なのですから、当然それだけの気心があわねばならないのでしょうが。

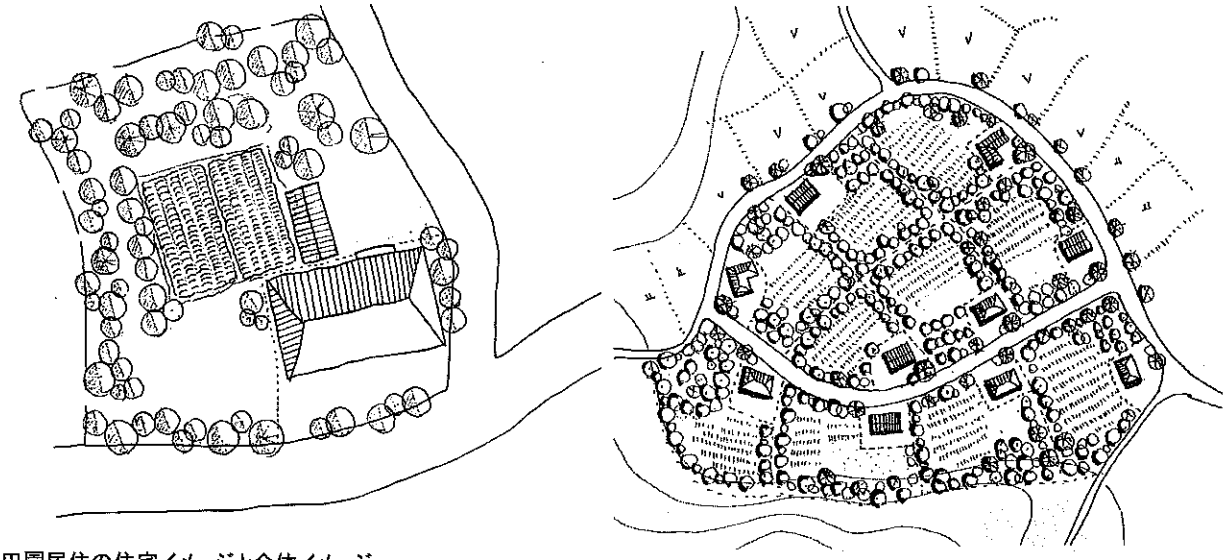
とにかく今もっとも不足しているのは、糸乗の「活動力」です。“共同まちづくり”なのですから、早く共同チームを作らねばならないと思っています。

現在の会員数は、ａ居住希望会員18人、ｂ事業協力会員12人、ｃヤジウマ会員11人です。ａ会員を少なくとも50人にしたいと思います。第１回の資料など（別掲）を入れておきますので、お知り合いに呼びかけて下さい。

受け入れ側の動きも出ています。町役場や農村の人も参加しています。７月中には、ａ会員を50人以上にした上で、現地に集まってわいわいがやがや言いながら、それぞれの思いを語る会をやりたいと思っています。家族連れの参加も歓迎で、バーベキューでもやりながら・・・・・・・・。

当面第１回の候補地は、鳥栖市と志摩町を考えています。他の候補地でもいいと思いますので、心当たりがあったらご連絡下さい。鳥栖市は私が住む気になっていたよい土地がたくさんあります。農地を買う（農地法を守りながら）ことがうまくいかず、断念したところです。九州全体へのアクセスがよく、高速道路や駅から５Kmぐらいのところで眼のさめるような土地がいっぱいあります。

住宅金融公庫のローンが借りられるそうです。公庫の方から聞きました。みんなの知恵を集めて、「値打ちの上がる」住まい造りをしたいですね。



田園居住の住宅イメージと全体イメージ

東京・大阪方面でも動きが出ています。6月19日頃に大阪で、説明会・呼びかけ会をしました（糸乗出席）。

「都市・農村の新しい土地利用戦略」（日本都市計画家協会編著、A6版300ページ、3,500円）という本が出ています。2000年の都市計画法改正を受けた本です。私はまだ柳沢さんのところしか読んでいませんが、これがなかなか単純明快な考え方でおもしろい。20%引きで購入できます。お待ちしています（この書評は別掲）。

●第1回　田園楽住の会の報告

4月22日に「第1回　田園楽住の会」を開催しました。いきさつや計画の進め方、参加者の自己紹介、今後の進め方などについてのフリー討論などを行いました。当日の概要は以下の通りです。

＜通勤できて、ゆとりのある暮らし＞

福岡都市圏には約200万の人がいます。その1%ぐらいの人は田園楽住のニードを持っていると思います。そうすると、約2万人（7千世帯）になります。この人達が、半ば過疎化している「都市近郊」に住めば、にぎわいが戻ります。福岡都市圏の周辺には、福岡都心まで1時間通勤という条件を持った市町村がたくさんあります。

＜便利なのに、高齢化し、子供が少なく、農地が荒れているような集落があります＞

農村集落の土地を買いあさって、「開発」をして利益を上げようという計画ではありません。集落の人達と協力して、1ヘクタールぐらいの土地に7～8区画つくります。

＜みんなで見に行って「コノユビターカレ」で、大体の参加者を決める＞

会員に声をかけて、現地見学をします。その上で居住希望会員の中から「コノユビターカレ」をやります。地主さん（農家）と、集落の人達と会ったり、土地柄を見たりした上で、「コノユビ・・・・・」に対して態度を決めます。難しいことではなく、特に嫌なことがなければいいのです。

＜まずは20代・30代の若い人達（一人でもカップルでも）の皆さんどうぞ＞

この計画の特徴は、「環境がよくて安い」ことです。

＜環境がよい理由は＞

一般の不動産業者がやる気を起こさないような事業だからです。①300坪のうち50坪しか宅地にしない（もちろん例外はあります）ので、事業屋としてはうま味がない。②都市計画事業として、保全を考えておく。

＜安く・都市の賃貸マンションより安いといいたいのだが＞

市街化調整区域に入っているような農村の地価は、安いのです。それを賃貸（定期借地権の予定）にするので、スタートはとにかく安い。建物はそれぞれの考えで違います。仮に賃貸マンション並で15坪ぐらいとすると、数百万円です。それも公庫のローンが組める。ローンが組めるなら、とりあえず一千万円かけて30坪の家を建てるという手もあります。

＜60代なんですが、私たちの田舎暮らしは、受け入れてくれないのですか＞

そんなことはありません。是非参加して下さい。年輩の方がおられると、若い人達の子育てをサポートしていただけるし、願ったり叶ったりです。

＜年々値打ちが上がる住宅に・・・・等と言っていましたが、マンションを買ってローンを払い始めたら、一年で半値近くに下がり、4～5年の間にローン残高の半分ぐらいになっている人もいますが・・・・＞

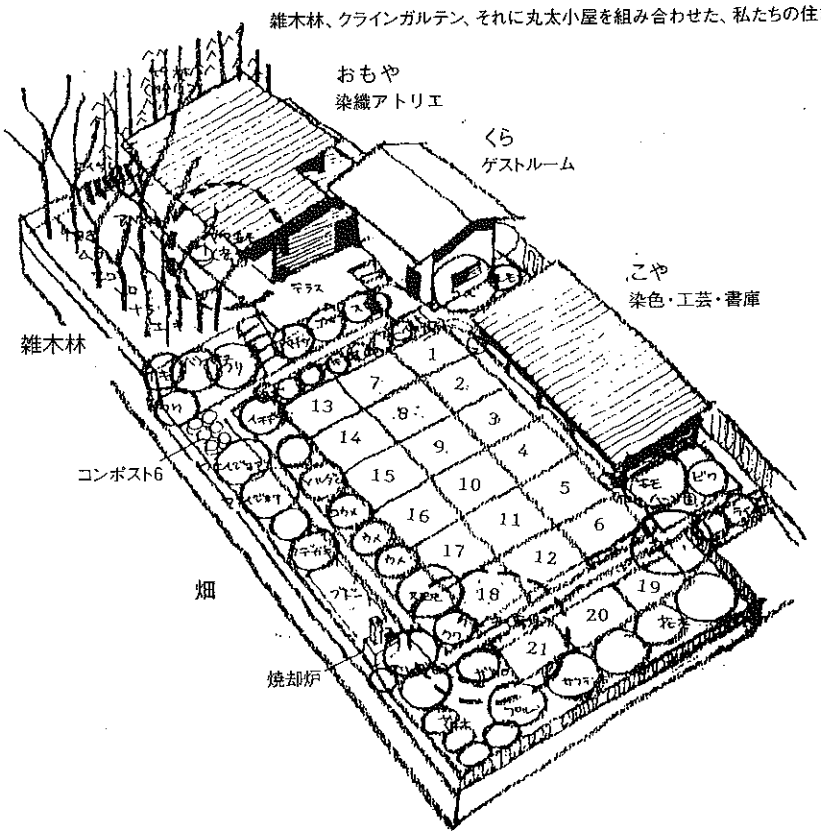
考えてみて下さい。家の周囲に菜園や花壇をつくり、実の生る果樹を植え、雑木が夏の太陽を遮り、冬は柔らかな日差しでひなたぼっこができるようになったりすると、誰が考えても土地はよくなっています。元来、都市圏周辺部の土地は、相場で動くようなものではないのです。そんな値打ちの上がる土地が下がるなら、他の住宅地やマンションはもっと下がります。田園楽住の方がはるかに“安心度”が高いと思いますが・・・・・・。

＜農村で暮らすのは、田舎の付き合いが大変なのでは・・・・＞＜勝手な都会の人間が入ってきたら、ムラがグチャグチャにされないか・・・・＞

そこが問題です。参加者の中から「グループの田園楽住はいい考えだ」という意見が出ました。「農村集落に一人だけで移住すると寂しいから、このようなグループだと付き合いもしやすいし、話仲間もいるし住み着きやすい」という意見も出ました。農村集落側の心配は最もですが、“都心への通勤時間が1時間以内”などという集落は、どの家も1～2人の通勤者を抱えた農家です。都市から移住する人と全く違った暮らし方ということではありません。

つばたさんの
300坪住宅

雑木林、クラインガルテン、それに丸太小屋を組み合わせた、私たちの住まい



＜時間的に50%しかムラの行事に参加できない人も、70%の人も、100%の人も、お互いが認めあって地域を支えることができないか＞

今では農村もかなり都市化しています。農村集落が大変なのは、古いしきたりと、戦後の近代化の中で始まったしきたりと、都市への就業・通勤とが重なっており、それと若い人や子どもの減少が重なっていることから起こっています。こんなことも一緒に考えながらムラづくりができないでしょうか。

＜年々値打ち＝利用価値が上がる住宅を造りたい＞

日本の不動産＝住宅は出来立てが最高で、竣工の日から下がり始めることになっています。こんな馬鹿な話はない。昔の日本家屋はそうではありませんでした。庭の木が茂り、実の生る果樹が成長し、生け垣も納まりがよくなって、少なくとも年々価値が下がるようなことはありませんでした。田園楽住は、減価償却の心配ばかりする住宅づくりではなく、価値が上がる（下がらない）住宅を造りたいのです。

＜都市近郊にある住宅は下がらないのか＞

最近、都市近郊の「白地地域」に建っている住宅を見て回りましたが、「20年後には、絶対買い手はつかないだろうな」と思いました。「なぜこんな農村の中で、軒を接するような狭い宅地に家を建てるのか」と不思議に思いました。工夫さえすれば、それより安くて、便利で、緑豊かな住まいができると思います。

●田園楽住Q&A

Q１　「若い人に」などと呼びかけに書いてありますが、日本では若い人の給料安いのですよ。それでも参加できますか。

A１　若い人でもOKという理由を挙げてみます。

①都市周辺地域の地価は高くない。対象集落の地価がベースになります。10万円／坪、20万円／坪といった風にそれらが基準になります。定期借地権設定料は、その30%等というように決めていくのです。

②宅地は50坪程度で考えています（環境を守るため）。上記の地価は宅地のみ対象。

③残りの250坪は農地のままか山林などです。地価もその地価です。

④宅地も農地も、借地で考えています。農家の収入が続くようにという考えです。もちろん双方の考え方がまとまれば、買収も可能です。

⑤土木工事は道路のみの予定です。１ヘクタール

(3,000坪)の開発で、道路部分は10%程度とすると、300坪の工事となる。仮に、道路費が用地込みで3万円／坪とすると、300×3≒1,000万円。8戸で負担すると1,000÷8≒150万円／戸となります。

⑥その他に家庭用浄水槽、井戸（上水道があれば要らない）をあわせて100万円ぐらいみておけばいいでしょう。

Q2　借地ということは、地代が要るのでしょう。

A2　用地の価格に対して、年何%というように決めます。

Q3　女でも参加できますか

A3　大歓迎です。いろんな人が住んで仲間付き合いすると楽しい暮らしができます。一戸300坪あるとゆとりがありますから、程良い間柄が保てるでしょう。

Q4　私は花作りをして店に出して売りたいのですが、農地を借りることができますか。

A4　農地法という法律があって規制されていますが、このごろはかなり柔軟なようですから、現地見学の時に地主さんか町役場の人に聞いてみてください。

Q5　将来のことか、近々なのかわかりませんが、友人と一緒に住む家を建てるかもしれないのですができるでしょうか。

A5　もちろんできるでしょう。しかし大きい家ということになると、はじめから600坪区画、450坪区画などを計画しておくこともできます。従って宅地も50坪だけでなく、70坪、100坪などとする事ができます。多様な人々が住むという意味からも、仲間居住はよいことだと思います。

Q6　農業をやることはできますか

A6　それも現地で聞いてください。

Q7　家は自分で勝手に建てられるんですか。

A7　もちろんですが、お互い様ですから人が不快になるデザインはやめようという「申し合わせ」をする予定です。会員に、地域の工務店や大工さんがおられますから相談して下さい。無理のない計画（資金計画、工期など）の相談にのってくれます。

Q8　喫茶店やイタリアン料理の店をやりたいといっている友達がいるのですが、お店などもできるのですか。

A8　考えられると思います。計画の中で「地区計画」という手続きがあります。その中で取り組んでいきましょう。

●田園居住計画の手順と入会の手続き

田園楽住の取り組み方や活動方針については、以下のように考えています。

○前提条件

①計画対象‥‥当面博多・天神を中心として、周辺田園樹園地帯

②立地条件‥‥博多・天神に1時間で通勤できるところ（ex.電車、バス、車などで）

③部分的に農地転用ができて、宅地ができること

○田園居住地はこんなところ

＜大原則＞

①農家と役所と居住希望者の合意形成ができること。この件はほとんど都市計画手続きが必要です。自分が住もうという目的ではなく、不動産として持っておきたいという方はお断りします。ただし、今すぐ住むことはできないが、近い将来自分か親族などが住む気でいる‥‥、それまでは自分でフォローするという人は歓迎です。

②候補地は田園や樹園地、山林を含む農業振興地域など。例えばミカン畑の耕作放棄地などで、人が住んで手入れをすれば環境もよくなるところ。

＜計画の考え方＞

①対象地は、1～2ヘクタール程度まで。大規模になると工事費がかさむし、無理が起こりやすい。その土地で300坪（1,000㎡）程度を10区画ぐらいつくる。

②まとまって土地がないときは、集落内や近隣地で2～3宅地ずつも考えられる。

③1区画300坪のモデルで考えてみると、農地や雑種地のうちの一部（50坪ぐらい）を宅地に地目転換する。造成工事を極力減らすため、原則として道路以外の部分は土地造成をしない。家を建てやすい部分を50坪程度宅地とする。

④これらのことは、原則として都市計画手続きで決める。

＜賃貸手続き＞

①初期の段階で、居住希望者と農家などの地主との間に、計画全体に対する合意書（覚え書き）を取り交わす。現実には居住グループと地主と会員の中のコーディネーターの三者によること

事業計画のプロセス

ステップ1：会を作る

まず15～20人の会員が集まって、「田園居住」を目的とした会を発足させます。会員は下記のような人になると思います。

a. 居住希望会員

- 会費：3,000円／年
- 20歳代、30歳代の金はないけど豊かな暮らしをしたい人
- 50歳代、60歳代の人で、ゆっくり田舎に住みながら、大都市にすぐ出かけられるところに住みたい人
- 自分で住む意志を持つ人
- 何となく田舎暮らしに興味ある人

b. 事業協力会員

- 会費：3,000円／年（農家地主、市町村役場、都市計画・建築設計事務所、工務店）
- 上記の人達で事業協力してみたい人
- 何となく田舎暮らしに興味のある人

c. ヤジウマ会員

- 会費：1,000円／年
- 「田園居住」に興味を持ってボランティアの気持ちで参加する人
- 農村の元気づけに興味のある人
- 農村でこんな地域づくりに興味を持っている人

- 東京、関西方面の人も、「将来の夢」をみるため、話の種に、1,000～3,000円／年の投資をしてみて下さい。
- またこの段階はボランティア活動の気分です。とにかく「会」を開いて、みんなの気持ちを話し合いましょう。

ステップ2：会員を増やす

本格的に事業化のための「会」づくり。第一段階の会員が新規会員を増やして、「100人」の会を目指します。
この名簿を持って、福岡都市圏周辺市町村の市町村長さんにお願いに行きます。

ステップ3：土地を探す

市町村長さんが賛成してくださる市町村で（農地転用のときに協力をしていただかねばなりません）、土地を探します。

- 土地の条件は通勤できるところ
- この計画に賛成で、地代収入に興味を持つ農家の人の土地
- 役所の紹介で候補地を見に行く
- 不動産屋さんなどの話も聞いて、農家や土地を探す
- 会員の中の知り合いに聞いて探す

ステップ4：会員のうちの希望者で、候補地見学ツアーをやる

この計画に熱心な地主さんの土地について、会員の意見を集約してチームを作ります。

となるか？

②300坪の賃貸契約は、50坪程度の宅地部分は「定期借地権」を設定する。残りの農地などは、現況地目のままで農家から借りることになる。地代は地域の立地条件によって変わるでしょう。

＜土木工事の進め方＞

①まずグループ全体と地主さんも入って、全体の配置設計をする。コーディネーターが案を作る。造成費のかかるような計画はしない。

②それぞれの区画へのアプローチに配慮した道路を造る。

③上水、下水（戸別の合併浄化槽）などは戸別につける。入居時期が違うので共同ですると高くなるし、無駄も増える。

＜住宅を建てる＞

①デザインの調整のために、地区計画でルールを決める。それによって、周辺の環境を破壊するような建物を建てる人が出てきにくいので、地価が下がるというような被害は受けないだろう。

②地区計画の範囲内で、各自がそれぞれ設計して建築します。

③b会員の中に、設計メンバーや安くて質の高い木造建築の工務店も入ってきます。コーディネーターが相談にのります。

（いとのり　さだよし）

第3回「協同組合　地域づくり九州」地域づくりセミナー

大規模投資型でなく、土地柄を活かした地域産業の「ぶどうの樹」

山田　龍雄、愛甲　美帆、糸乗　貞喜

当社が加盟している「協同組合　地域づくり九州」では、交流会員や賛助会員との交流や、地域づくりの現場の話からの勉強を兼ねて、毎年セミナーを開催している。今回は、大規模投資するのではなく、田園の中での“ぶどう園”という土地柄を活かしながら、段階的に施設計画や事業起こしを行い、今や正社員70～80名、パート約150名の企業となった「ぶどうの樹（㈱グラノ24K）」での現地セミナーを行った。

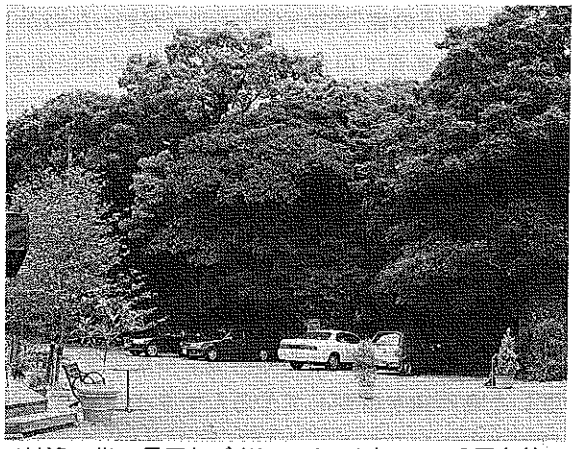
「ぶどうの樹」の前評判が良かったためか、約60名の参加があった。当日は、現地視察の後にぶどう園の下でのセミナーと、交流会での美味しいワインや食事も加わり、参加者の方は都会のホテルでは味わえない満足感を得られたのではなかったかと思う。

小役丸社長からは「ぶどうの樹」のいきさつと経営や地域への思いなどを、おもしろ、おかしく語っていただいた。お話の中で、印象に残ったこと、現地で感じたことをまとめてみた。

【国有林の借景を含めての“ぶどうの樹”。気分のよい空間は手作りだからこそできた】

5月の初めに、私と理事長の糸乗とで、事前打ち合わせのため、「ぶどうの樹」を訪れた。

小役丸社長と簡単な打ち合わせを済ませたあと、



ぶどうの樹の雰囲気づくりのひとつとなっている国有林の楠の木

現地を案内していただいた。岡垣町の手野（ての）にある「ぶどうの樹」の周囲には、豊かな原生林が植わっており、糸乗が「あの樹はどこの樹なんですか」と尋ねると、「あれは、楠の原生林で国有林です」とのことであった。また、「ぶどうの樹」のセンター広場の周囲に一際大きな楠の木を見つけて同じ質問をすると、「枝が敷地内に入り込んでいますが、これも国有林の楠の木です」。

まさに「ぶどうの樹」は、周囲の国有林があるからこそ、この豊かな緑の中での「ぶどうの樹」を演出できているのである。やはり「ぶどうの樹」は、この周囲の風景や緑を含めての土地柄を活かしているからこそ、お客さんに気分の良いサービスが提供できているのである。

今回、セミナーを行った「ゆかいな果樹園」というのは、日頃は結婚式やパーティーなどを行う多目的スペースである。ここは、ぶどう園をそのまま活かして、ぶどう棚の上部にガラスを葺き、床は所々あるぶどうの樹を避けて板を敷いてある。

冷暖房は、ぶどう棚の上部にむき出しのまま設置されており、全く違和感はない。まさに床付きのぶどう園温室なのである。

この建物は、専門家に相談せず、この立地条件と環境を活かした雰囲気作りのため、お金をかけず、知恵を絞り、手作りで行ったからこそ、気分の良い空間ができたのではないだろうか。

これをもし、変な専門家というのか、柔軟性のない専門家に頼んでいたら、いろいろな建築上の制限について専門知識をフル活用し、固くて非常につまらない建物になっていたのではないかと十分想像される。建築の上でも少し勉強させられたセミナーであった。　　（やまだ　たつお）

【お客様に嘘を言うまい。人づくり、ものづくりを大事に夢を語れる会社に。スタッフの接客もすばらしい】

セミナーでは、まず㈱グラノ24Kが岡垣町内に展開する主な店舗を案内していただいた。岡垣町の波津海岸沿いにある小役丸社長の祖母がはじめられた旅館「八幡屋」とそのすぐそばでコンテナを活用した「鮨屋台」、そしてぶどうの樹内にあるパン屋やカフェなどをみせていただいた。

小さな電球を散りばめられたブドウの木の下、丸テーブルに着席すれば屋外の緑が鮮やかに目に入るなごやかな雰囲気の会場でお話をうかがった。

「ぶどうの樹」は旅館業→農業→ぶどう園での観光産業に事業を展開されてきた（経緯の詳細はよかネットNo.38を参考）。現在“食と健康”をテーマに事業をされている。

講演の最中、小役丸社長は「嘘を言うまいと思った」と何度も言われた。昭和50年代のこと、お客様に「うわぁ。これは本当においしいヒラメですね。この海で採れたのですか」と聞かれても正直に「いえ、これは天草で採れた・・・」と説明するとお客様はがっかりされた。また、団体の宴会料理では茶碗蒸しや海老フライなどその土地の味がしないものの食べ残しが多いことに疑問を持っていた。

農業をしているので野菜を育てる際、必要な時期に必要な量の農薬をかけることでその後の成長具合が歴然と違うことが分かっている。農薬散布を0か100かということよりも「これは育成の一時期農薬をかけていますが農薬の残有性はありません」ときちんと説明し、後はお客様に選択してもらうという方法を採るようにした。これは野菜に限らず他の食材も同様である。このように「嘘は言いたくない。採れただけを、生産地を明示して、安心して食べてもらえばいい」と思われているそうだ。

ぶどうの樹は現在社員70名、パート150名を雇用されている。会場からは「どのような社員教育をされているのか」という質問が出た。社員の方は若い方が多く、高校を中退した人など個性ある人が多いそうだが、お客様に褒めてもらうことで成長するということだった。とにかく実体験を一緒につむということを大事にされている。先日も厨房もホールスタッフも総勢で園内のレンガ張りを3日間かけて行ったそうだ。また“もてなし”

を学びにグリーンツーリズムで有名な大分県安心院町への宿泊。味の勉強ということで、東京のデパートの地下研究やラスベガスへの研修。ドイツやニュージーランドにあるぶどうの樹の契約農家へ収穫に行くなど、多くの研修の機会を設けている。

ぶどうの樹の食材は地元の農家から、質は良いが規格外で市場に出荷できない野菜、育成途中で間引いた野菜などを仕入れている。月100万円の取引になる農家もあり、農家からは「自分のつくった野菜がきちんと表示され、提供されているので嬉しい。頑張ってよ」と言われるそうだ。

「時代環境、地域環境に合わせた事業をしたい。皆が夢を語れる会社にしたい。利益はそのための手段です」と小役丸社長は言われた。

セミナーの後、料理やワインを囲んでの交流会を行った。出された料理もちろん美味しかったのだが、スタッフの方の料理やワインの説明・勧め方がとてもさわやかで、より深く味わうことができた。小役丸社長の思いを現場で聞き、交流会で実感することができ良かったと思う。

（あいこう　みほ）

【なぜ“ぶどうの樹”でのセミナーにこだわったのか】

まず写真を見ていただきたい。明るくて、広々としていて、すばらしい雰囲気。中央で話している方が小役丸さん。このホールの上をちょっとのぞいてみたのが天井の上で、ぶどうの間から見えているのが透明とブルーの波板とそれにダクトである。この広いホールの中に柱はなかったが、その理由は軽量な屋根にあると思えた。

「ぶどうの手入れはどこからするんですか」と聞いたら「床をはがしてやるんですよ。もちろん肥料も」といわれた。ぶどうのツルは柱のところから上がっている。その柱は鉄骨造だが、そこを土色の紙で巻いている。私のようにしつこい人間以外は誰も気づいていないようだった。

何もあら探しをしているのではない。この天井裏と柱を巻いている紙が、この“ぶどうの樹”の「すごさ」を表しているのである。

念のため書き添えると、総ガラス張りの建物を建設会社が建てるのと、農業用の総ガラス張りの鉄骨ハウスではコストが10倍違うと思う（後者は３万円／坪程度）。減価償却と金利（お客様がもっとも嫌う軽費）が10倍も違うかもしれない。

（左）明るく広々
（下左）ぶどうの間から天井のぞく
（下右）ぶどうの手入れ、水、肥料等はこの床をめくって。鉄骨は紙でカバーしてある。

はたして帰り道で「建築基準法では‥‥」という声が聞かれた。私は「安全第一・信号第二」主義者なので、四方は逃げやすい戸や扉で、その外は中庭や森や畑や田で囲まれているところでは、全く不安を感じない。信号（細かい規則）に気を取られるより、客の安全を第一に考えていただきたい。

この“ぶどうの樹”は、東京のテレビ局が最もねらいそうな（10年前までは見向きもしなかったのに）、居心地のよいところである。だから「危険がいっぱい」とも感じた。どうか小役丸さん、雑音に耳を貸さず、「小さい規則第一でなく、お客様の安全第一」に、「投資第一ではなく、お客様へのサービス第一」を貫いて、骨太の経営を続けて下さい。　　（いとのり　さだよし）

今年もたくさんの方に来ていただきました
～第11回よかネットパーティー～

梶原　里香

５月の連休があけて１週間足らず、例年よりも少し早い５月10日（土）、11回目となるよかネットパーティーを警固神社にて行いました。その報告をします。

●パーティーの準備は淡々と進む

パーティーの用意は毎年９時頃から始めます。会場となる場所では机を並べたり、受付の用意をしたり、壁新聞を貼ったり。台所ではお皿を洗ったり、クーラーボックスの用意（中には板氷をびっしりと敷き詰める）、事前に送っていただいた品物を盛りつけたり、などします。その頃同時進行で、会場の外では燻製を焼き始めます。

最近は警固神社で行うことが多いこともあり、また、しなければならないことの確認や当日の役割分担を事前に行っていることもあってか、準備はスムーズに進みます。

準備が一段落するのが11時30分から12時頃。ほっと一息つきながら事前におにぎりで腹ごしらえをします。毎年この「一息つく」の時間がちょっとあるのですが、今年はいつもと違いました。

●パーティーは13時からなのに・・・

パーティーは毎年、13時開始となっています。パーティー開始の乾杯をするころには、大体40～50人くらいが会場に集まっています。

ところが今年は、12時を過ぎた頃からポツリ、ポツリと参加者の方が姿を見せ始めました。その人数は次第に増えていき、開始時刻の13時にはどのテーブルも人だかり、例年のピーク時くらいの人数（70～80人くらい）が集まっていたのではないでしょうか。おいしそうなものが目の前に並んでいることもあり、乾杯をする前から食べ始める人が続出。もちろん、ひともうけの輪もあちこちで見られました。

こんな状態だったので、時間通りに13時頃会場に到着された方の中には「時間を間違えた？」と思った方もいるのではないでしょうか。私は台所から、何度もパーティーに来て下さっている人は、おいしいものを食べ逃すまいと会場に来る時間が早くなっているのかなぁ・・・と思いつつ、この様子を眺めていました。

●食べ物・飲み物だけでなくいくつかの見せ場も

今年のパーティーでも出席されている方の「一芸」がいくつか披露されました。

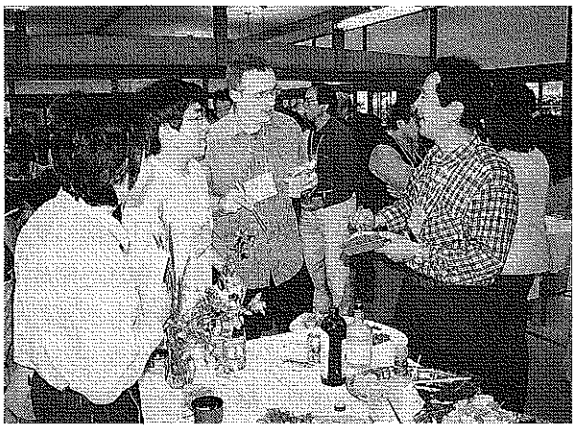
佐賀県七山村でわさびの栽培をされている諸隈雅博さんによる葉わさびたて。葉わさびたてを行った机の周りにはたくさんの人が集まっていて、葉わさびのツンとした香りが周りに広がっていました。

そして昨年にひきつづいての田中由紀さんらテンプ・ファイルズによるアカペラコーラス。昨年、このパーティーで歌ったことがきっかけでいろいろなところで歌う機会を増やしているそうです。

モンゴルから久留米大学に留学されている阿思根さんの娘さんによるモンゴル舞踊には大きな歓声が。とてもしなやかな手足の動きに思わず見とれてしまいました。

たくさんの人が集まって、ひともうけの輪が広がるということが、このパーティーの楽しみの１

クーラーボックスにびっしり並んだ板氷



あちこちでひともうけの輪が広がっていました

つだと思いますが、このような見せ場があるのも新たな楽しみの１つになっているのではないでしょうか。

●今年のパーティーはずっとピークの人数

今年のパーティーの出席者は102名でした。２時間30分のパーティーの間、どのテーブルにも人がいる、常に80人くらいの人数を保っていたように思います。

昨年から皆さんが持ってきて下さったものの中でも、ご飯ものやお菓子などは後半に出すといった具合に、時間を見計らってちょこちょこといろんなものをテーブルに運ぶという工夫をしていたので、常にどこかのテーブルに新しいものがあるといった状態になったのではないかと思います。

終わったあとの反省会では、例年の如く所員の間で「○○はおいしかった」「そんなものは見ていない」といった会話が繰り広げられたのでした。

（かじはら　りか）

皆様から寄せられた「よかネット」へのご意見、近況などの紹介①

NO.63に同封していたハガキで様々な御意見、近況等が寄せられました。その一部を今号と次号で紹介させていただきますします。

（順不同、敬称略）

■その時々に興味あるレポートに感心しております。電子媒体もよいのですが、このような紙媒体も捨てがたく、続けていただきたいものです。個族シリーズのようなシリーズものをもう１つくらい欲しいと思います。例えば博多定点観測なんてどうですか。　（横浜市　伊達　美徳）

■「数学の経営学」をテーマに情報集めをしています。一人一人が観念や感情に流されることなく、数学の窓から考えていく力をつける時代になってきました。企業、地域、そして一人一人も“経営”こそがすべてです。

（福岡市　鍋山　徹）

■先日、よかネットパーティーに初めて参加しました。私自身、最近福岡の方へ越してきたばかりでしたので、様々な方々と交流する機会となりました。とてもすばらしい活動だと思いました。今後、私どもも企業として、また個人的にも情報のinput、outputをし、地域の活性化にお役に立てればと思います。

（福岡市　綾部　恵理子）

■昨年末、クリスマスイベントを行橋駅前にて開催。イベント時30万円をオーストラリア、ブリスベン市のアーターホスピタル・マクドナルドハウスへ寄附しました。福岡市子ども病院にも隣接のマクドナルドハウス（患者の家族のための宿泊施設）が欲しいですよね！世界にたくさんあるのに日本にはない！

（福岡県行橋市　野本　誠）

■皆様のご活躍と継続の力を毎月拝見し、うらやましいやら、楽しいやらで読ませていただいております。日々厳しい折、がんばりの一端をいただき力づけていただいております。

（千葉県我孫子市　山口　佐由喜）

■田園楽住の会に興味があります。現在は東京の都心で暮らしていますが、いつかは農業もやりながら、まちづくりもやっていきたいと考えています。農業の基本を学ぶコースを首都圏でもできないかなあと思いました。

（東京都品川区　佐谷　和江）

■ご多分に漏れず大阪も不景気。小生も不如意続きですが、妙にある種の落ち着き、快適さも覚えるこのごろです。“当たり前”と“在り来たり”の区別もつかない、がむしゃらさはもう御免です。「だからどうした？！それが何だ！？」なんて反応ばかりでしたから・・・。この辺りでよく“苦しむ技術・悩む技術”を身につけなさいとの神の思し召しなのでしょう。そんな気分で「よかネット」いつも楽しみにしています。　（大阪市　稲村　純）

■浪人生活も次第にルーティン（マンネリ）化してきています。足腰の立つ間にせいぜい旅行し

ようと思い、７月から３カ月、日本を離れて船旅をしてきます。　（北九州市　林　一信）

■昨年４月から北九州市契約室に勤務しています。経済状況が低迷する中で、公共工事を巡る動きは、国・県を含めてめまぐるしいものがあります。市民が信頼し、かつ地元企業が活性化するような公共工事の発注という難しい課題と奮闘しています。今後とも「よかネット」からの様々な情報発信を楽しみにしています。

（北九州市　丸山野　美次）

■「よかネット」は毎号、新発見があって楽しみです。いくつかのコンサル広報誌が届けられますが、比較してみてダントツ。これだけの内容を毎号、充実される努力は並大抵ではありません。取材に生きては“生活者”の気迫を感じられます。　（愛知県春日井市　津端　修一）

■大学論－若衆宿は秀逸。昔、中村秀一郎と対話したことがあり、「変な大学」を文部省が×にした時に備えて、事前に研究所をつくり、教員候補者全員を備う準備をした。京都精華大も「もっと変な大学になるぞ」と大広告を出し、学内で苦言。僕は賛成した。ワンパターンの大学は滅べ。　（京都市　末石　冨太郎）

■昭和17年生まれの私にとって、去年から今年にかけて学校同期、あるいは同期入社の仲間から60歳定年退職の挨拶状を数多く受け取りました。その多くは会社が定めた定年によるものですが、自ら定めて悠々自適の生活に入るもの（中には弁護士も）がいたことは新しい時代の到来を感じさせました。

（熊本県久木野村　高畠　一純）

■当社では中国人研修生事業を行っており、現在約1,200名在籍。この５月、６月入国予定がＳＡＲＳで延期になりました。受入企業の生産活動にも影響が出そうです。研修生や技能実習生は若衆宿に入っているようなものです。

（大阪府高槻市　宮川　敬章）

■いつも興味深く拝見しております。特に統計データの使い方、読みとり方に感心させられます。世の中の動きは統計数字に表れているはずですが、従来通りの集計方法では必ずしも明らかにならない動きについて、的確に示してくれて新鮮な驚きがあります。これからも楽しみにしています。　（岐阜県羽島市　大竹　亮）

■長い間、住環境整備に関わっていましたが、昨年より監査事務局への異動を契機に、趣味の囲碁を通して、「小倉城子供囲碁塾」（入門者を対象）、「北九州市少年少女囲碁祭」（４月20日参加者300名）を主催し、老若男女が同時に楽しむことができる頭脳ゲームで伝統文化の継承を目指した活動を行っています。

（北九州市　高瀬　親史）

■今、群馬県佐波郡東村というところの新規の用途指定案策定業務を手がけています。2000年法改定についてＮＰＯ家協会のシンポ・テキスト・新版参考書が大変役に立っています。伊勢崎市との合併話も近々結論が出る見込みで、線引都市と未線引都市の合併の後の「あるべき論」が重要になってくると考えております。拙紙「ふるさとカワラ版」も休刊していましたが、またがんばって復刻する予定です。

（群馬県前橋市　丸山　明保）

■環境と健康にいい自転車の道にはまって早６年。日本の各地（といっても西日本）を旅しています。自転車の旅はいろいろなものが見えてきます。今や人間が忘れかけているスローなペースに自転車は最適です。街並み、文化、歴史、人情、道の野花・・・。「よかネット」で語られている活動が一層見えてくるような気がします。

（大分県大分市　井出　晃）

■いつも新情報などを楽しく読ませてもらっています。今年の９月19日～21日の間、奈良・今井町では全国町並みゼミが行われます。伝建地区の重文建物を使って分科会（16テーマ）も行われます。ぜひともお越し下さい。今、奈良＝大和では、「史と文化・自然を生かす地域再生の検討」が大学やＮＰＯ、市町村で進められています。　（大阪市　宮本　孝二郎）

■私は今、大分県人会（福岡の）に関与しています。佐伯市及び県南と北九州・博多の交流の一環として「駅長おすすめの釣りとグルメ一泊の旅」を提言中です。　（福岡市　安藤　延男）

■行政、市民のまちづくりをサポートするため、ＮＰＯの設立を計画中ですが、大阪府では既に800余りあるとのことで窓口は多忙の毎日。審査に４カ月もかかるとのことです。

（兵庫県川西市　高橋　久栄）

宗像大社・沖ノ島体験記

清々しくもあり、面白きこともある沖ノ島

山田　龍雄

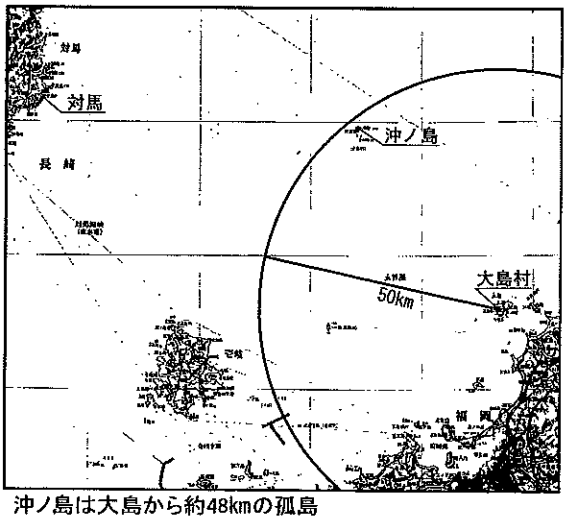
●10数年前からの沖ノ島への思い

私の沖ノ島への憧れは10数年前にさかのぼる。

ある会合で宗像市職員の方から、小さな漁船で吐きながら沖ノ島へ行った体験談を聞き、単純に大変だろうけど、行ってみたい思った。また、司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」でロシアのバルチック艦隊が日本海側、太平洋側どちらから進んでくるのかを各地点で偵察していたときに、最初に発見した島が沖ノ島であったと記されていた。このことが非常に印象に残っており、この島から実際にバルチック艦隊が発見されたという海を眺めたいと思っていた。

それから10数年が経過し、昨年、当社が加盟している協同組合「地域づくり九州」の理事会で雑談の場になったときに、「“地域づくり九州”という名前を付けているのであれば、遊びで九州の秘境や面白いところを探索した方が良いのではないか」との話で盛り上がった。そこで九州探索の第１候補として「沖ノ島」が取り上げられ、私が企画担当者となった。

当然、沖ノ島へは日常的に参観できないが、年に数回は一般参加できるイベントがあるとの情報は得ていたので、３月の初めに早速宗像大社に連絡し、参加希望者名簿を送った。４月半ばに大社から案内状が個人宛に送られ、さらに最終的に個人で参加表明の葉書を出すと、整理番号付きの葉書が届けられた。その葉書が沖ノ島へのパスポートとなる。今回、私たちのグループは５名で参加した。



沖ノ島は大島から約48kmの孤島

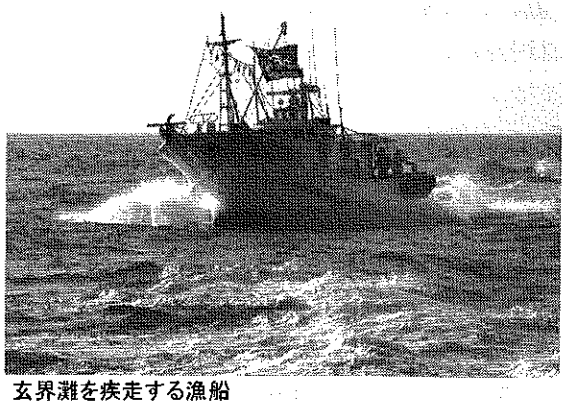
●宗像大社は全国区である

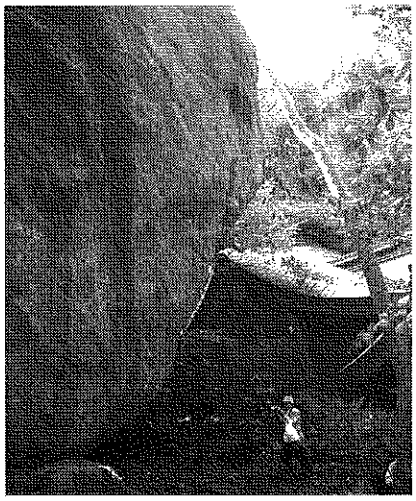
沖ノ島に渡る前日の18時に大島村の中津宮に行くと、200人以上の人が集まっていた。中には山伏の格好をした人などもいた。あとで聞くと三重県、鹿児島県、北海道など全国から参加しており、改めて宗像大社が全国区であることを再認識した。また、中津宮には女性のグループの方も参拝に来られていた。女性は沖ノ島へは行けないが、中津宮までは参拝するようだ。その後、受付と当日の漁船の班分けが行われ、さらにライフジャケットも渡された。

●漁船で座るポジションが決まると動けない

前日は民宿での食事を済ませ、22時過ぎには床についた。興奮していたためか、同室メンバーからのいびき攻勢のためか、寝不足だったが５時前に起床した。民宿の人に波の状況を確認すると、晴天であったが前日までの低気圧のせいで波は２～３ｍと高いらしく、出航するかどうかは五分五分とのことであった。

内心、吐くことは覚悟してきているとはいえ、波が高い中で行くのはいやだなあという思いと、折角来たのだから無理してでも行きたいといった思いが交錯した。しかし、６時過ぎに集合場所に行ってみると既に漁船へ荷物を運んでおり、出航が決定したことがわかった。当初、宗像大社事務局から送ってきたスケジュール表をみると、大島から沖ノ島までは３時間かかるようになっていたが、なんと１時間20分程度で到着した。最近の漁船の性能のすばらしさに感心したが、時速40kmのスピードで荒波をかき分けることから、縦揺れに


玄界灘を疾走する漁船



沖津宮での大岩。この上で祀り事が行われていた

加え、たまに大きな横波からの横揺れもあり、結構な迫力であった。一端漁船で座る場所を決めるとほとんど動けない。グループの中には何人か吐く人もいたが、私は運良く運転席の後上部に設置された簡易ベットに座ることができ、吐き気は喉元まで来ていたが、かろうじて止まってくれた。

●日本の神道はおおらかである

上陸すると、船着き場の隣の小さな入り江で既に数10名の方が、真っ裸で御祓をしていた。これはなかなかの迫力である。私たちグループも、すぐ真っ裸になり、海に浸かった。5月末の海水はやや冷たかったが、この上なく清々しいと感じると同時に、宗像大社の神様には申し訳ないが単純に『これは面白い』と思った。

その後、本宮での大祭には時間があったので、頂上（一ノ岳243m）まで一気に登り、周辺の海を見渡したのであるが、誰もちゃんとした地図を持ってきていなかったことから、霞んで見える島々を見て、みんな勝手に「あれは対馬だ、いや壱岐だ、五島列島の先端部分だ」などと言っていた。地形に対するイメージが、これほど個人によって違うものかと変に感心してしまった。

本宮は、船着き場から10～15分程度登ったところにある。それは大きな岩に密着するように設けられ約2間四方ぐらいのこじんまりとしたお宮であった。しかし、5～6世紀には、この大岩の上で祀り事していた遺跡が発見されており、本当の本宮はどうもこの大岩であるらしい。

大祭が終わると、直会（なおらい）の儀式があった。直会といっても形式的なものではなく、1本300円のビールを購入し、漁師さんが造ってくれた鯵や鰯の煮物を肴にし、船着き場での野外食

漁師さんの手作りの魚の煮付けで直会

事会であった。沖ノ島は、神聖な島であることから、当然、写真も禁止であろうと思っていたのであるが、写真撮影も自由であり、直会もそれほど格式張ったものでなかった。やはり日本の神道はおおらかである。

帰りは折角、用意したレインコートを活用しなくてはと思い、甲板の真後ろに座ったことから、1時間20分間、滝のような海水を全身に浴び続け、全く酔う暇はなかったものの、ずぶ濡れとなってしまった。今年は十分海水を浴びたので、海水浴に行かなくてもよさそうだが、沖ノ島へは、機会があれば再度挑戦したい。　（やまだ　たつお）

企業と技術協力で障害者の雇用の場をつくった「福祉工房　亀のパン」

愛甲　美帆

福岡県糟屋郡須恵町に、平成15年4月に建設された須恵町ボランティアセンター内に知的障害者が働くパン屋さん「福祉工房亀のパン」がオープンした。須恵町は昭和54年に地方自治体では初めて健康課（現在は健康福祉課）が創設され、心身ともに町民の健康を図ろうと食生活とスポーツを中心としたまちづくりに取り組んできた町である。

ボランティアセンターの福祉工房は1階にパン工房、吹き抜けの2階には工房で作ったパンの販売と飲み物が飲める「ベーカリーカフェれいんぼー」がある。パンは宅配も行っている。1階には、町が運営する自然食普及センター（手作り味噌や健康に良い食品、体に優しい生活用品が販売されている店）があり、店内から隣のパン工房の様子がうかがえるつくりとなっている。また、老朽化のため、合わせて建替えられた福祉センターが隣

接している。

障害者の働く場を町が作ったということで、どのような運営をされているのか、須恵町健康福祉課と委託運営を任されている社会福祉協議会（以下社協）の方にお話を伺った。

●町に障害者の経済的自立ができる就労の場を作る

須恵町では、平成12～13年度に「共生のまちづくり」として福祉事業や福祉活動のネットワークを図り、住民参加の福祉のまちづくりを進めようと町民の40人委員会を作った。２年間の委員会の中で障害者の地域での就労支援という課題が挙げられており、平成15年には、様々な福祉機関、活動団体の活動拠点としてボランティアセンターが建設されるので、その施設内に障害者の就労の場を作ることになった。

計画当初から、障害者年金とここの給料で将来的に自立につながるよう、県が示す最低賃金を支払えるような職場づくりを目指すことが前提とされた。「パンだったらその日じゅうに食べきれるし、またお腹がすけば食べたいと思う」ということからパン屋が良いのではということになった。

40人委員会では２年目に障害者が働くパン屋の視察に東京に行った。また、健康福祉課はパン製造の技術協力先を探すため、おいしいという評判のパン屋を調べては、試食を繰り返したそうだ。その結果、石焼き窯で焼かれるパンがおいしいと好評で長蛇の列ができる「パン・ナガタ」に技術提携をお願いすることになった。何度も足を運び協力先になってくれたとのことだ。

「亀のパン」は町から社協への知的障害者就労支援事業の委託となっている。「パン・ナガタ」とは社協が技術協力の契約を結んでおり、パン職人の派遣とコンサルタント料を支払うという内容である。派遣されたパン職人３名の給料は、その委託費から支払われる。

●働くことで気づき、積極的になっていく

パン工房の設備は町の補助で行い、配達に使う車などは宝くじの助成金で購入された。

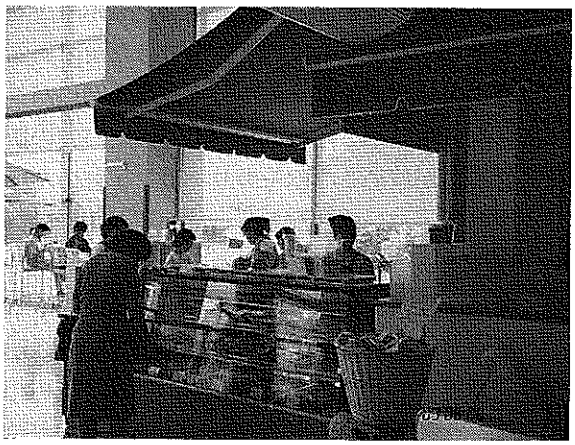
就労者の募集は、町内に住む知的障害者で自分で来て帰れる人、制服の着脱、挨拶、返事ができることを条件に面接が行われた。30人の応募があり養護学校を卒業したての18歳～30歳後半の８人が採用された。８人は月曜日～土曜日の9時～16時の固定勤務体制である。

「亀のパン」全体の人員体制は、「パン・ナガタ」から派遣されたパン職人３名とトータルマネージャー、経理、ボランティアのジョブコーチが11名、パン製造部門３名、その他作業のパートさんと合わせて30名によるシフト体制になっている。

売上げ管理など現場のマネジメントはトータルマネージャーの方と経理担当の方がされる。トータルマネージャーの方は40人委員会のメンバーだった方で、以前は主婦だったが、委員会の視察に参加していくなかで「私がやる」と手を挙げられたそうだ。また、パン製造部門の３人の方は、当初からパンづくりの技術習得ということで募集ををされた。

仕事は製造、梱包、宅配、喫茶の４つに別れており、本人の希望と適性で決められた。製造では、基本的なパンを作るのは職人の方で、器具洗い、パンの砂糖づけ、チョココルネのチョコクリーム入れなどをする。梱包では、できあがったパンの袋詰めをし、配達伝票をみながら仕分けをする。

配達は午後からで、宅配指導員とペアで車にのって近隣の町役場や町内の企業などに配達に行く。



開放感あふれるおしゃれな「ベーカリーカフェれいんぼー」

パン工房。１日の仕事を終えたところに、笑顔で。

取材当日もちょうど配達から帰ってこられたところに出くわしたが、運転されていた方の話によると、定年退職された男性の方で何か役に立ることはないかと思った時に車の運転ならできると応募されたそうだ。喫茶である「ベーカリーカフェれいんぼー」では、ショーケースに並んでいるパンと飲み物の販売をする。ケースの中から注文のパンを取ったり、飲み物を作る。パンは30種類の銘柄を覚えて接客をする。

ジョブコーチは、ボランティアセンター完成とともに立ち上がった知的障害者支援ボランティアグループ「レモン」のメンバーで、ここに仕事をしに来ているという意識づけや作業のサポートをされている。働きだして2か月たったが、シールを切る時に斜めに引っ張ればうまく切れると気づいたことで作業が早くなったことを喜んだり、はじめは指示を待っていたがボランティアのジョブコーチに「次は何をしましょうか」と聞くなど積極的になってきているそうだ。仕事帰りは仲間と並んで帰っているそうで、少し具合が悪くても出勤するくらい仕事が楽しい様子とのことだ。

●おいしいパンにリピーターが多い。

4月にオープンして2か月。人気のパンはメロンパンと食パンで、リピーターが多く、月の売り上げは500万円を超えたそうである。隣設している福祉センターのお風呂の利用者が200人/日で、お風呂に入って「亀のパン」に寄る方も多く、福祉センターの休館日の玄関には「ほたるの湯は休業ですが亀のパンは営業しています」という立て看板まで置いてある。4月から5月まで働いた初給料は、目標の最低賃金に及んではいないものの時間給にして500円程度の給料が出た。

●これは第1歩。

印象的だったのは「まずは、軽度知的障害者の働く場としてこれを定着させること。様々な障害をもった方の支援、次のステップへつなぐことを意識して一歩一歩確実に進みたい」という言葉だった。現在「亀のパン」は町から社協への事業委託となっているが、いずれはここの売上げだけで全てが支払えるようにという意識で経営していくという意気込みが感じられた。

募集の際30人の応募があり、ここに採用されなかった方については、個別の支援にあたっている。この町の取り組みが障害者の企業支援のモデルになることも期待されている。

町がこのような場をつくったことで、そこで働く人や地域の新たな可能性が引き出されていっているように思った。　　（あいこう　みほ）

蔵を使って、町中でホタルを見られる環境づくり

本田　正明

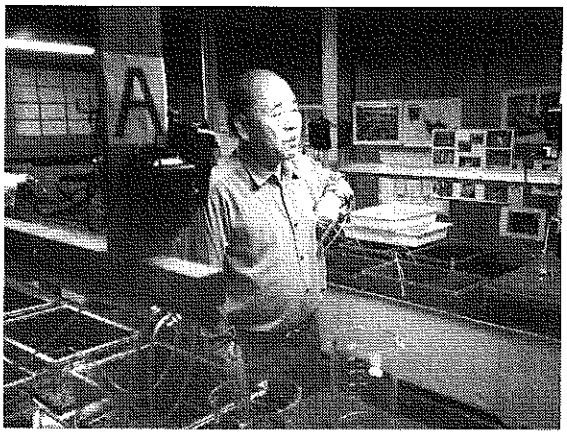
昔からある建物のよさを見直して、地域の資源として活用していこうという話はよく聞く。私は歴史的建造物の保存とか、町並み環境整備などの取り組みについて詳しく知らないが、「蔵がゲンジホタルの飼育場になっている」という話を聞いて、他でもやっているのかなと関係する本を2、3冊ほどみてみた。載っているのは蔵の中をきれいに改装して飲食施設にしたとか、ギャラリーや博物館、資料館などに活用しているといった華々しい話ばかりで、「蔵でホタルを育ててます」という話は載っていなかった。あまり模範的な蔵の活用策ではないかもしれないが、地域のアイデンティティになる取り組みだなと思ったので紹介したい。

●ホタルはもともと先人が持ち込んだもの

蔵でホタルの幼虫を飼育しているのは、山口県山口市にある一の坂川というところである。ホタルといえば、山裾の農村を流れる小川のようなところにいるといったイメージがあるが、一の坂川は住宅街の真ん中を流れている。「なんでこんなところにホタルがいるのだろう」と思って、一の坂川流域マップというパンフレットをみると「大内氏24代弘世の時代（1363年頃）に京より迎えた姫君の都を偲ぶ哀愁を慰めるために宇治からホタルを取り寄せ、それが山口に土着したもの」とあり、「土着のゲンジボタルでは数が足りなかったので昭和41年より山口県農業試験場でこのゲンジボタルの飼育、放流が始まりました」とある。どうやら先人が持ち込んだものをずっと維持してきているらしい。昭和10年には天然記念物にも指定されている。

●土蔵がホタルにとっていい飼育環境になっている

現在ホタルの飼育をされているのは、山口ふる



蔵の中には水槽がびっしりと並んでいる（写っている人は平野さん）

カワニナ取りは、ホタルの幼虫が食べきれるサイズを探すのが難しいそうだ

さと伝承総合センターの平野愼吾さんという方である。なんで蔵でホタルを飼育するようになったのかを聞くと、一の坂川とホタルにまつわる出来事がずらりとのった年表を見せて下さった。

それを見ると、農業試験場が毎年10万匹単位で行っていたホタル幼虫の飼育が昭和57年に中止になっている。それから３年ほどホタルの飼育は行われなくなってしまったのだが、平野さんの話だと、当時一の坂川に近い大殿小学校の先生で、ホタル飼育の経験がある岡迫さんという方が、コミュニティー研究会というのを立ち上げて、小学校でゲンジボタルの発生状況と生息環境の調査を始めた。その際に、川の近くにあった野村酒場の土蔵を飼育所に使い始めたそうである。土蔵は室温の変化が少なく、ホタルの飼育環境にも適していた。

その後、ホタルの飼育を地域で受け継ごうと地元の人によって「大殿ほたるを守る会」がつくられ、また蔵の周りも山口ふるさと伝承総合センターとして整備されている。

現在でも大殿小学校の児童たちがホタルの幼虫の餌となるカワニナ取りを手伝ってくれており、毎年17,000匹程度のホタルを育てるために多くのカワニナを一の坂川から取っている。

●川が地域の自慢やデートスポットになっている

川の様子を眺めに外に出ると、ちょうど学校の下校時刻だったので、川沿いを下校する中学生たちを多く見かけた。桜並木と石垣のある川はなかなか風情がある。ホタルが見られる区間には歩道橋が３本も掛かっており、ホタルが舞う時期になるとカップルの格好のデートスポットになっている。

ホタルが最も多い週末（これは天候の状態や川の水温などから予測できるのだそうだ）には、ほたる祭りが行われ、婦人会によるバザーなども行われている。一の坂川やホタルが地域の自慢になっている。

それでもホタル飼育の後継者がいなかったり、町が高齢者ばかりになってしまっているそうだが、地元を出ていった若い人たちに、盆や正月だけでなく、ホタルを見に帰っておいでといえる環境があるのはいいなと思った。（ほんだ　まさあき）

所　員　近　況

■NPOが会員に支給する交通費とは

法人の取得には定款が必要である。もちろん、法人格の取得とは関係なく、独自に定款やそれに準ずるものを持っている組織もある。定款自体は組織の目的などの方向性や基本的な柱となる部分を示すものであって、実務上はもっと細かいルールが必要になって、内部規定ができたり、不文律みたいだったりする。

昨年の暮れに、地域づくりの市民グループ、グラウンドワーク福岡が特定非営利活動法人となった。定款は数年前に定めており、法人格取得に際して手直しをした程度である。グラウンドワーク福岡は組織体制が結構複雑（いろんな人が役割を持って関われるようにするため）なので、定款と同時に運用細則も定めて、広報、教育、企画、総務などの専門委員会の体制などを書いている。

ところが、事務局運営をしていくには、さらに細かい内規が必要になってきた。現在２名いる有給スタッフの就業規定、会員の旅費規程、表彰に

関すること、受託事業の会員への再委託に関することなど。

実は私、これらを作成する総務委員会の委員長を任されることになり、現在検討を進めている。

この中で、例えば旅費規程について考える。これはスタッフが出張などで外に出るときのものではなく、会員が集まりやすくするためのものである。通常は事務局のある福岡市内で会議を行うが、会員は福岡県内各地におり、南端の大牟田からは西鉄電車で片道1000円、北側の小倉からではＪＲの普通か快速で1250円、時間の都合で新幹線を使ったりすると2050円かかってしまう。これが福岡市内だと、職場の多い天神や博多から事務所までバスで200円前後である。

これは多分、広域的に活動しようとするグループには発生しがちな問題であって、会議を福岡市内の人たちばかりで進めていいかというとそうでもないし、基本はボランティアだから交通費は自己負担だと言っても、時間も金も使って来るので人によっては結構厳しい。

そこで、遠くの人には交通費の支援をしようということになった。では、どこからが遠くの人なのか。確たる根拠ではないが、およそ福岡都市圏の範囲の電車賃と、金額的にキリがいいので、片道500円以上を対象とした。支給額は500円を超えた分の半額ということで最初考えたが、計算すると結構せこい額で、これでは人集め対策にならんなあということで500円を超えた分の全額支給、往復分はその倍とした。

金額については、どこの地域はいくらという規程を作る案もあったが、バスを乗り継ぐような地域（実際には車で来る）もあって、それを作るのはかなり面倒そうだった。ということで、「最短の公共交通機関の料金を目安に自己申告」とした。

どの会議や行事を支給対象にするかという問題もあった。会の行事やイベントは県内各地であり、偏りが出る可能性はあるが一概に地域格差があるわけではない。一般参加者もいたりするので、これは対象外。結局、通常の定例会議や理事会等を支給対象とした。会議に参加する人数や回数はそんなに多くはないので、予算的には大した額にはならずにすむ。

近くても回数が多い人はどうするか等の意見もあるが、会員から要望が出れば考えるということで先送りとした。

ＮＰＯ法人としてのルールは必要だけど、あんまりガチガチにしてもそもそも自主参加なんだし、手続きばかり増えてもいやだし、という中での内規づくり。やってみて文句が出ればまた考える、の繰り返しになるかも知れない。　（伊藤　聡）

■米の粒度を測りに九州大学まで

ひょんなことから、九州大学の超高圧電子顕微鏡室のお世話で米粉の測定調査を行うことになった。米粉とは米の粉のことだ。

私は、とある地域で米パン商品の事業化をお手伝いしている。最近は米パンづくりを古米や屑米の流通価格を支える取り組みとして注目する地域が増えてきた。米パンは米を挽いた米粉を材料とするが、各地で米パンが作られるようになっており、「パンに近い味がする」段階を超えた「米の美味しさがする」段階への工夫が必要になっているように思われる。

そういうことに関わりはじめて、時折、自分でも試作をしているのだが、気になっているのは安定した米粉の確保である。

米パンの先駆けといわれる新潟県食品研究センターが開発した特許技術は、米粉に水分を含ませて潰し、乾燥させて蒸気できりもみにして微細米粉を作るものだ。これでできる「40ミクロン以下。丸い形状」というのが、米パン用米粉の一つの基準のようにいわれる。ところが、その設備は作れば数億円単位といい、この特許でライセンス生産を行う新潟の製粉会社に加工委託したり米粉を購入してパンを作れば、売れる値段にならない。

そこで全国各地で様々な製粉技術とパン生地づくりの工夫が行われるようになり、成功したケースも少しずつ出てきた。私も製粉加工技術をもつ工場や研究者、生産者に会い話を聞いている。

九州大学の顕微鏡で調べたかったのは、米パンにとって、米粉の粒の大きさや形状、粒の大きさごとにみた構成比など、実際にできあがる米パンの姿や風味・味わいと照らし合わせた、最適と思われる米粉の状態についてである。

「九州大学で優れた顕微鏡があるらしいから行って覗かせてもらったらどうか‥‥」といってくれた上司の紹介で、米袋を下げて訪ねてみた。

そこは九州大学の箱崎キャンパスの中にあり、少し分かりにくい所にあった。「顕微鏡室」とい

うから小さな部屋かと思って呑気に行ってみると、そこは3階建ての建物で、建物の外部にも鉄管やら高圧空気の設備やらが詰まった何やら大変な施設だ。入り口近くの掲示板にはナノテクノロジーに関連した資料や学会に関連したポスターが数多く貼ってある。

ここに来て、自分がとんでもなく場違いなところに来たことを後悔した。今から自分は最先端の研究機器（しかも国立大学の）を使って、こともあろうに米の粉を測ってもらう交渉を始めようというのだ。思わず米の袋を鞄にしまい込んだ。

断られること確実と思いながら、お訪ねしたのは工学研究院材料工学部門にある超高圧電子顕微鏡室の金子賢治先生。

ひとしきり来意を説明したが、先生の第一声は「40ミクロンは我々の扱う世界では巨大な大きさです。我々はナノの大きさを扱うんです」というもの。ああ、やっぱりダメだったと思っていると、「米は一般的にどのように挽いているのですか？」と先生が質問。それに答えると、物性のことや分子の組成のことを交えてどのように測定すればベストか解説して下さった。それに答えたり再び意見をうかがったりしているうちに、どういうわけか米の粉の測定をお引き受けしていただけることになった。

ちなみに米の粉はナノの世界をみる高圧電子顕微鏡で観察する大きさではないので光学顕微鏡がよいとのことだ。同席していた研究員の藤昇一さん、文元振さんも交えてお話しをしたが、聞いてみるとここの超高圧電子顕微鏡は文部科学省が推進するナノテクノロジープロジェクトの啓蒙活動で様々な活躍の場面が期待されているものだという。学内外から様々な測定の依頼が寄せられている。

今回のような米パンのための米粉という農業食料分野における相談は初めてだとのことで、そういう点で私は幸運だった。

「地域振興に役立てて下さい」とはありがたい言葉である。

測定に関してご協力いただく代わりに、この施設でどのようなことを行いどのような成果がもたらされたか、簡単な研究報告書を文部科学省に来春提出することが必要となる。ユーザー登録と研究申請書を提出した。いずれにしても、米粉をこういう形で計測して、もし研究成果としてまとめることができるならば、いろいろと地域に広めていきたい。　（尾崎　正利）

■都会の若い核家族は孤立しそうで大変だ

私の知り合いに学生の間に子どもができて結婚をした友人がいる。ふたりとも学生だったので、たしか友人が22歳で奥さんが19歳の時だったと思う。その彼と最近あったのだが、家庭が社会から孤立しそうになっているという話を聞いた。

結婚してすぐに彼は設計の仕事を始めたのだが、夜遅くまで仕事があり、会社の人に飲みに誘われても家庭があるためつきあいがどんどん少なくなった。奥さんも学校を辞めて専業主婦になっているから、親戚や高校時代などの友人以外のつながりがなく、子どもが小さいから外にも出れず、育児のストレスのはけ口を旦那に向けるしかない。二人とも怒りやストレスを発散する場、悩みやグチを聞いてくれる人とのつながりがなくなってしまったそうである。彼等は社会に出ると同時に核家族を形成したために個族にはならなかったが、核家族になることでかえって孤立しかけていた。

子どもが保育園に行くようになって、子どもを通じた知り合いができてきたそうだが、子ども以外に接点がないから父親同士の交流はあまりない。そのころから彼は家庭の外にも、新しいつながりを持つことが必要だと思うようになったそうだ。

●核家族もネットワークに飢えている

私は社会に出て個族になって3年目だが、ひとりだと週末が寂しいので、劇団に参加してみたり、着物の着付けなど変な活動にちょくちょく参加しているおかげで楽しい生活をおくれている。自立なんてとてもまだまだだが、ふと孤独なときに、自分が何をしたいのか、できるのか、などと考え

初めての芋掘り。なかなかうまく芋が抜けません

る時間がある。個族でいることが、社会にでてから自立するまでの“自分の生き方模索期間”、“自立準備期間”として役立っているように思う。

青壮年がネットワークを広げられる場になっている「モンブラン倶楽部」（よかネットNO.58号参照）に彼を連れていくと、さっそくママさんの畑でのじゃがいもの収穫を手伝いに、子どもといっしょに来ることになった。子どもにいろんな体験をさせたいのだが、知り合いもいないので、なかなかそういう活動に参加するチャンスもなかったそうだ。着物の着付けにもくるといっていた。家族が社会から孤立しないように、新しいネットワークを広げるチャンスを探しているから行動もすばやい。ネットワークやつながりの必要性を意識している人は違うな、と感心してしまった。

●若い人は、孤立しないためにもっと多様な付き合いに参加した方がいいのではないか

彼は畑仕事には４歳の娘さんを連れて来ていたのだが、最初のうちは土に汚れるのを嫌ったり、虫におびえたりしていた。集まっているメンバーも独り者や年輩の夫婦、耳が不自由な方等世代も仕事も異なる多様な人たちだったので、とまどいも感じていたようだ。しかし、いつの間にやら小学校３年生ぐらいの女の子が良きお姉さんになって、仲良く手をつないだりして草取りなどをしていた。耕作作業のときは、疲れて休んでいる年輩の方が子どもたちをみてくれていた。家族だけで遊びにいくと、子どもが何をしているかをずっと見ておかないといけない。気が抜けないので疲れがたまるのだが、今日はいろんな人が見てくれているので、非常に助かった、と彼はいっていた。

同世代間でひさびさに会っても、どうしても友達同士だけで安い居酒屋で飲んだり、カラオケで歌うくらいで、ワンパターンな行動になりやすく、飽きやすい。私が独身でなければ、みんな家庭の愚痴ばかりになって飽きてしまうのではないかといっていた。同世代の付き合いは楽しいがそれだけで完結しやすく、つきあいの幅が広がらない。彼とはときどき会っているものの、子どもに会うことすら３年ぶりだった。私などのような青年層は社会でのつきあいがまだまだ少ないので、意識していないとすぐにネットワークが切れてしまう。ひとつのネットワークを強固に守るのは、なかなか難しいので、いろんなネットワークを重ね持った方が、つながりが切れにくくなり、ネットワークが長く続くのではないだろうかと思った。

（本田　正明）

仲間が集まって、思い思いの田舎芝居ができる都市計画

■都市・農村の新しい土地利用戦略

学芸出版社
ＮＰＯ法人
日本都市計画家協会
［編著］

「規制・誘導」という言葉が嫌いである。この言葉には、正しく導く人と愚かな導かれる人というイメージがあるが、実際は強引にうまいことする人と、それができない人に分かれていた（念のために書き添えると、私は線引きを否定だけしているのではなく、今からでも必要なところはあると思っている）。

ところがこの本には、それぞれの“思い”が生かせるようになっていますよ、と書かれている。ひとくちで俗な言葉で括ると「2000年の都市計画法改正は、規制緩和をして土地需要を増やし、地価が上がるまちにしようというねらいだったのに、その手続きを自治体に委ねたために、自主的なまちづくりの動きが起こったり、規制強化さえ起こっている」という意味を示している。そしてこのことを柳沢さんが「問題提起」にまとめています。

まず、この序章を読むだけでなんだかスリリングな気分が味わえます。今までの都市計画では大体が、誰が、どんな方法が「正義の味方か」という話があると、チャンチャンバラバラがなくなった。そのかわりに舞台裏の方で、どこかで線が引かれ、その「右か左かで金もうけのための天国と地獄を分ける」ということであった。まことに味も身も蓋もない話で、陰々滅々たるパントマイムであった。

15年くらい前に「再開発地区計画」という制度ができたとき、「柳沢さん、容積負けてもらっても使えるのは東京くらいだし、補助金も増えそうにないし、こんな制度は意味ないんじゃないの」と話したことがある。「いや実は、この都市計画としての白地づくりという意味もあるんですよ」

といって諸々の説明をしてくれたことがある。そのときは、「そこまでできるなら意味があるかもしれんなあ‥」という思想を持った。たしかにうまく運用すると、相当に計画区域内の人々の“思い”を実現する手法でもあり得ると思えた。

今回、柳沢論文を読んでいて、すぐにその時の話が思い出された。

たしかに、今回の法律では周辺の了解を得ておけば、仲間が集まって「自分たちの好みのストーリーで、気心の知れた配役で田舎芝居をやってもいい」という気がする。

以上、少々訳の分からぬことを書いたが、この本は柳沢をはじめとして、日本の錚々たる人々が、「都市農村の新しい土地利用戦略」を述べている。新しい考え方の都市計画で、「一丁やってみようか」と思う人のための手引きに最適の本と思います。ぜひに一読を！　（糸乗　貞喜）

■都市のルネッサンスを求めて

ー社会的共通資本としての都市1ー

東京大学出版会
宇沢弘文・
薄井充裕・
前田正尚［編］

本書は、日本政策投資銀行設備投資研究所が「Economic Affairsシリーズ」として企画・刊行している本の一つである。

編者の一人、前田さんは政策投資銀行の前身、開発銀行時代に福岡に赴任されていた。当時はあまりおつき合いは無かったのだが、福岡に出張で来られた時に、現在福岡で勤務されている鍋山さんから連絡をいただきお会いして話をする中で、九州地域だけでなく、地方の主体的な活動に非常に興味を持たれていたことを覚えている。

さて、この本の内容だが、表題にある「社会的共通資本としての都市１」というのは、国内外の具体的な事例が紹介されている「実例編」であり、パート２が「理論編」となる。

このパート１では、欧州都市再生における事例として、公共空間、車社会、ゾーニング、地域公共交通、さらに廃棄物処理、資源循環等、今欧州で取り組まれている都市再生の様々な切り口が紹介されている。都市再生の産業面からの切り口として、シリコンバレーと札幌の比較が行われているが、都市は「知を生み出す生態系」であり、「実体験のネットワークとしての都市」づくり、基盤づくりの必要性が指摘されている。国内の事例では、社会的共通資本としての町並みの保存、日本社会の基礎的な部分としての「農村」、自然環境、文化等を維持するため地域の試み、そして国際的な自然遺産である「阿蘇の草原」を保全するための都市住民との連携など、都市の復活と農村の再構築のあり方について述べられている。

アメリカ的な発展形態が限界にきている今、21世紀型の都市、地域の発展に求められているのは、「人間的」「社会的」「自然的」なものであり、すでにヨーロッパでは1990年代からそういう運動が息吹いており、日本においては農村との連携、都市との「関係」の再構築が重要になっている。例えば「食の安全」「環境保全」「コミュニティの維持」等、様々なテーマがあるが、いずれも20世紀にまっしぐらに突き進んできた成長・発展という名のもとに開発が進められてきた結果、今我々に残されている借金ではないだろうか。これを返済していくために皆で知恵を出していかなければならないし、この借金を棒引きできるような「知」はないだろうなと、この本を読んで思った。大学の「知」ばかりに期待するのではなく、みんなが頭の汗をかかなければいけない。

（山辺　眞一）

編集後記

亀のパン見学の時、須恵町で見つけた「ごちそうぶっく」。須恵町の健康づくりの集大成として出されたこの本に載っている食事は実際に町内の保育所で出されているとか。私の健康づくりにも役立ちそうです。　（り）

よかネット　No. 64　2003. 7
（編集・発行）
㈱よかネット
〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F
TEL 092-731-7671　FAX 092-731-7673
http://www.yokanet.com
mail:info@yokanet.com
（ネットワーク会社）
㈱地域計画建築研究所
本社　京都事務所　TEL 075-221-5132
大阪事務所　TEL 06-6942-5732
東京事務所　TEL 042-501-5231
名古屋事務所　TEL 052-265-2401
㈱地域計画・名古屋